

臨床実地問題 50 問(解答時間 2 時間)

- 1 眼球のある部分の組織像を別図 1 に示す。
正しいのはどれか。2 つ選べ。
- a 房水を吸収する。 b 血液房水関門が存在する。
c 毛様体扁平部の組織像である。 d 無色素上皮は実質側に位置する。
e 色素上皮は網膜色素上皮に連続している。
- 2 38 歳の女性。視野の右側に小さな稲妻のようなちらつきを自覚したため来院した。ちらつきは徐々に拡大し 20～30 分ほどで消失した。患者自身が見え方を描いた図を別図 2 に示す。
誤っているのはどれか。
- a 片頭痛を伴うことがある。 b 網膜硝子体の牽引が原因である。
c 症状は目を閉じていても自覚する。 d 左右片目ずつ見ると両眼ともにちらつきを自覚する。
e 過度なストレス、チョコレート、ナッツ、アルコール摂取が引き金となる。
- 3 65 歳の男性。右眼の中心視野が見えにくくなったため来院した。2 年前に飛蚊症を自覚し近医を受診したときにも右眼眼底の異常を指摘されたことがある。矯正視力は右 1.0, 左 1.0。眼圧は正常。角膜と前房および中間透光体に特記すべき所見はない。右眼眼底写真, OCT 像, フルオレセイン蛍光眼底造影写真(初期, 後期)を別図 3A, 3B, 3C, 3D に示す。左眼眼底に異常はない。
最も考えられるのはどれか。
- a 脈絡膜母斑 b 眼内リンパ腫 c 脈絡膜悪性黒色腫
d 滲出型加齢黄斑変性 e 中心性漿液性脈絡網膜症
- 4 11 歳の男児。転倒して左眼を強打したと訴えて来院した。視力は両眼ともに 1.2(矯正不能)。眼圧は右 12 mmHg, 左 14 mmHg。前眼部と中間透光体および眼底に明らかな異常は認めないが、嘔吐を繰り返している。頭部矢状断 CT 像を別図 4 に示す。
正しい対応はどれか。
- a 経過観察 b 高浸透圧薬点滴静注 c 制吐剤と鎮静剤の投与
d 副腎皮質ステロイド点滴静注 e 可及的早期の眼窩底整復術
- 5 ある検査の ROC(receiver operating characteristic) 曲線を別図 5 に示す。
正しいのはどれか。
- a 多変量解析の一種である。
b 検査の適正なカットオフ値を求めるために行われる。
c グラフの原点から 45 度で伸びる直線に近くなるほど精度が高い。
d 曲線を得るには感度と特異度が異なる検査を繰り返す必要がある。
e 感度の高い検査は上に凸になり、特異度の高い検査は下に凸になる。
- 6 2015 年度に身体障害者福祉法に基づき視覚障害の認定を受けた成人の原因疾患の内訳を 50 歳未満と 50 歳以上に分けて別図 6 に示す。
A と B に当てはまる疾患の組合せはどれか。
- a A: 白内障 B: 外傷 b A: 変性近視 B: 白内障 c A: 変性近視 B: 緑内障
d A: 緑内障 B: 白内障 e A: 緑内障 B: 黄斑変性

- 7 糖尿病網膜症患者の受診中断と網膜症悪化の関連について臨床研究を行い、リスク比を算出した。解析結果を別図7に示す。
誤っているのはどれか。
a 観察研究である。 b 倫理委員会に申請が必要である。
c 毎年受診を基準に検討されている。 d 毎年受診と1年以上中断には有意な違いがある。
e 2年以上中断すると網膜症は約4.6倍有意に悪化する。
- 8 74歳の女性。右眼の流涙を主訴に来院した。涙道造影CT像を別図8に示す。
考えられるのはどれか。
a 涙小管閉塞 b 総涙小管閉塞 c 鼻涙管閉塞 d 涙嚢腫瘍 e 眼窩蜂巣炎
- 9 9歳の女兒。両眼の流涙と眼脂を主訴に来院した。両眼の前眼部写真を別図9に示す。
適切な治療はどれか。
a 睫毛拔去 b 睫毛電気分解 c 眼瞼挙筋短縮術
d ボツリヌス毒素療法 e 睫毛内反症手術(Hotz 変法)
- 10 45歳の女性。右下眼瞼腫瘍が1年前から徐々に大きくなったため来院した。前眼部写真と病理組織像を別図10A、10Bに示す。
診断はどれか。
a 基底細胞癌 b 扁平上皮癌 c 悪性黒色腫 d 母斑細胞母斑 e 脂漏性角化症
- 11 41歳の男性。左眼瞼下垂で紹介されて来院した。初診時の外眼部写真を別図11に示す。
まず行うべき対応はどれか。2つ選べ。
a 眼窩MRI検査 b 左眼瞼下垂手術 c 抗アクアポリン4抗体の測定
d 右上眼瞼副腎皮質ステロイド注射 e 抗甲状腺刺激ホルモン受容体抗体の測定
- 12 18歳の女子。3日前から左眼の充血と眼脂が出現したため来院した。左眼前眼部写真と結膜塗抹標本写真を別図12A、12Bに示す。
適切な全身投与薬はどれか。
a ペニシリン b トブラマイシン c ミノサイクリン塩酸塩
d レボフロキサシン水和物 e セフトリアキソンナトリウム水和物
- 13 45歳の男性。左眼の異物感を主訴に来院した。前眼部写真と病理組織像を別図13A、13B、13Cに示す。
診断はどれか。
a 脂腺癌 b 乳頭腫 c 基底細胞癌 d 尋常性疣贅 e 扁平上皮癌
- 14 別図14に示す器具を検査に用いるのはどれか。
a 緑内障 b 流涙症 c ドライアイ d 加齢黄斑変性 e 角膜ヘルペス
- 15 28歳の男性。市販の感冒薬を内服した翌日から両眼の充血と眼痛が出現したため来院した。今朝から赤い斑点(発疹)が全身に出現した。体温39.4℃。右眼細隙灯顕微鏡写真とフルオレセイン染色写真を別図15A、15Bに示す。左眼も同様の所見である。
適切な対応はどれか。
a 解熱薬を処方する。
b 近くの内科へ紹介する。
c 抗菌薬を処方し1週後の来院を指示する。
d 皮膚科専門医のいる大学病院等へ紹介する。
e アデノウイルス感染を疑い自宅待機を指示する。

- 24 68歳の女性。右眼で見ると人の顔が中心に集まって見えると訴えて来院した。矯正視力は右0.8。
予想されるOCT像は別図24のどれか。
a ㉠ b ㉡ c ㉢ d ㉣ e ㉤
- 25 25歳の男性。急性の下方の視野障害を主訴に来院した。矯正視力は左1.2。眼底写真を別図25に示す。
正しいのはどれか。
a 術後に変視症を生じる。 b 硝子体手術が第一選択になる。
c 術前の仰臥位安静が望ましい。 d 気体網膜復位術の適応ではない。
e 水晶体再建術との同時手術が必要である。
- 26 32歳の男性。1か月前から左眼に飛蚊症を自覚し、徐々に視野も狭くなってきたため来院した。視力は左0.3(0.8×-1.75D)。左眼眼底写真を別図26に示す。
治療に用いられるのはどれか。
a ペニシリン b ガンシクロビル c インフリキシマブ
d セフトジジム水和物 e バラシクロビル塩酸塩
- 27 51歳の女性。1週前から右眼の霧視を自覚したため来院した。矯正視力は右0.9、左1.2。眼圧は右28 mmHg、左21 mmHg。右眼の前房内には細胞がみられ、硝子体混濁もみられた。全身症状はないが、毎年、健康診断で胸部レントゲンの異常所見を指摘されており、呼吸器内科で経過観察を続けている。右眼の後極部と下耳側の眼底写真を別図27A、27Bに示す。
治療に用いられるのはどれか。
a アダリムマブ b コルヒチン c フルコナゾール d プレドニゾロン e メトトレキサート
- 28 63歳の女性。左眼の視力低下を主訴に来院した。視力は右1.2(矯正不能)、左0.1(矯正不能)。眼圧は右16 mmHg、左15 mmHg。左眼眼底写真とインドシアニングリーン蛍光眼底造影写真を別図28A、28Bに示す。
視力低下の原因はどれか。
a 網膜分離 b 網膜下出血 c 滲出性網膜剥離
d 網膜色素上皮下出血 e リポフスチン異常沈着
- 29 61歳の男性。3週前から左眼の霧視を自覚したため来院した。初診時の視力は左0.05(矯正不能)。1か月前から四肢、腹部、背部の皮膚に小丘疹が多発している。初診時の左眼眼底写真、フルオレセイン蛍光眼底造影写真、OCT像、前腕皮膚の写真を別図29A、29B、29C、29Dに示す。
診断に有用な検査はどれか。
a ヒト白血球抗原(HLA) b RPR(rapid plasma reagin)法
c サイトメガロウイルス抗原血症 d 可溶性インターロイキン2受容体
e 抗CCP(cyclic citrullinated peptide)抗体
- 30 4か月の乳児。出生時に全身の異常所見はなかったが、母親が眼位の異常に気付き来院した。家族歴に特記すべき眼疾患はない。両眼ともに前眼部と中間透光体に異常はなく、右眼の眼底は正常である。左眼眼底写真と超音波Bモード像を別図30A、30Bに示す。
適切な対応はどれか。
a 経過観察 b 遺伝子検査 c 放射線治療 d 化学療法 e 眼球摘出術
- 31 28歳の女性。眼症状は特にないが、四肢の疼痛を自覚していた。10歳ごろから角膜の異常を指摘され経過観察を受けており、精査目的で来院した。右眼前眼部写真を別図31に示す。左眼も同様の所見である。
考えられる検査結果はどれか。
a 血中レチノール低下 b 血中セロプラスミン低下
c 尿中グリコサミノグリカン高値 d 血中 α -ガラクトシダーゼA活性低下
e 血中可溶性インターロイキン2受容体上昇

- 32 4歳の女児。完全屈折矯正眼鏡(右+1.75 D, 左+1.75 D)を常用している。矯正視力は両眼ともに1.2。瞳孔と眼球運動に異常はなく、近見眼位(別図 32A)は右内斜視 30 プリズム、遠見眼位(別図 32B)は内斜位 2 プリズムで、+3.00 D レンズを付加すると近見の内斜視は減少する。遠見では同時視を検出、近見では同時視も立体視も認めない。
適切な治療はどれか。
a 二重焦点眼鏡 b プリズム眼鏡 c 内直筋後転術
d 下斜筋後転術 e 内直筋ボツリヌス療法
- 33 9歳の女児。生後3か月からの眼位異常に母親が気づき来院した。初診時の視力は右0.9(1.0×-1.00 D), 左0.4(0.8×-1.50 D⊃cyl-0.75 D Ax90°)。前眼部と中間透光体および眼底に異常はない。左眼固視と右眼固視の眼位写真を別図 33A, 33B に示す。
本疾患にみられないのはどれか。
a 内斜視 b 潜伏眼振 c 下斜筋過動 d 異常連合運動 e 上転眼の外方回旋
- 34 8か月の乳児。視線のずれに母親が気づき来院した。Hirschberg 法による眼位写真を別図 34 に示す。
斜視角(プリズムジオプトリ)はどれか。
a 15 b 20 c 30 d 40 e 50
- 35 68歳の女性。数日前からぼやけを自覚したため来院した。視力は右0.5(1.0×-1.50 D), 左0.6(1.0×-0.50 D⊃cyl-2.00 D Ax90°)。左方視で複視が強くなる。Hess 赤緑試験の結果を別図 35 に示す。
正しいのはどれか。
a ㉠ b ㉡ c ㉢ d ㉣ e ㉤
- 36 64歳の女性。起床時に左眼下方視野が見えにくいことに気づき来院した。疼痛と赤沈亢進およびCRP上昇を認めない。左眼眼底写真と視野検査の結果を別図 36A, 36B に示す。
正しいのはどれか。
a 女性に多い。 b 上半視野欠損が多い。 c 小乳頭に生じやすい。
d 血小板凝集阻害薬が有効である。 e 抗アクアポリン4抗体陽性が多い。
- 37 15歳の男子。視力低下を主訴に来院した。視力は右0.3(矯正不能), 左0.04(矯正不能)。両眼の眼底写真と右眼フルオレセイン蛍光眼底造影写真を別図 37A, 37B に示す。
診断に有用な検査はどれか。
a 抗アクアポリン4抗体 b アンギオテンシン変換酵素
c ミトコンドリア遺伝子変異 d 抗好中球細胞質抗体(ANCA)
e 抗ミエリンオリゴデンドロサイト糖蛋白(MOG)抗体
- 38 75歳の男性。10年前から両眼の緑内障に対して点眼治療を受けている。眼科手術の既往はない。5年ほど前から徐々に両眼が落ち窪んできたと訴えている。眼周囲の写真を別図 38A, 38B に示す。
このような副作用を生じうる緑内障点眼薬の特徴はどれか。
a 徐脈の副作用がある。
b 眼内レンズ挿入眼は禁忌である。
c 昼夜を問わず眼圧下降効果を有する。
d 眼圧下降機序は房水産生を減らすことである。
e 点眼回数を増やすことで効果を増すことができる。

- 39 75歳の女性。左眼の眼痛と視力低下を訴えて来院した。視力は左光覚弁。眼圧は左60 mmHg。左眼前眼部OCT像を別図39Aに示す。
適切なものはどれか。2つ選べ。
a 散瞳薬による眼圧上昇が疑われる。 b 鈍的外傷による眼圧上昇が疑われる。
c 濾過手術を考慮する。 d 水晶体摘出術を考慮する。
e 周辺虹彩切除術を考慮する。
- 40 50歳の男性。2年前に左眼の緑内障に対して濾過手術を施行し、2日前から左眼の視力が低下したことを主訴に来院した。視力は左0.08(0.8×-3.00 D⊂cyl-2.50 D Ax140°)。眼圧は左6 mmHg。軽度充血を認めるが眼脂は認めない。前房と硝子体に炎症性細胞を認めない。前眼部写真を別図40A, 40Bに示す。
治療で誤っているのはどれか。
a 圧迫眼帯 b 自己血注入 c 濾過胞再建 d 抗菌薬点眼 e ピロカルピン塩酸塩点眼
- 41 9か月の乳児。2か月前に硬膜下血腫の既往がある。両眼の眼底写真を別図41に示す。
疑うべき疾患はどれか。
a 色素失調症 b Terson 症候群 c 新生児網膜出血
d Purtscher 網膜症 e shaken baby syndrome
- 42 21歳の男性。サッカーボールが左眼に当たり視力低下を自覚して近医を受診した。3か月間経過観察されたが、回復しないため紹介されて来院した。視力は左0.2(矯正不能)。眼圧は左12 mmHg。左眼眼底写真とOCT像を別図42A, 42Bに示す。
正しい対応はどれか。
a 経過観察 b 網膜レーザー光凝固 c 経強膜網膜復位術
d 内境界膜剝離併用硝子体手術 e 自家網膜移植術
- 43 78歳の女性。以前から右眼の充血と眼脂を繰り返しており、その度に抗菌点眼薬を処方されていたが、軽快しないため紹介されて来院した。前眼部写真を別図43Aに示す。
外科的処置で使用する器具を別図43Bに示す。適切なものはどれか。2つ選べ。
a ㉠ b ㉡ c ㉢ d ㉣ e ㉤
- 44 73歳の女性。左眼の視力低下と痛みで来院した。8年前に左眼にレーザーで治療を受けた既往がある。観血的治療を行い、視力の回復を得た。術前と術後の前眼部写真を別図44に示す。
行われた治療はどれか。2つ選べ。
a 角膜内皮移植 b 水晶体再建術 c 周辺虹彩切除術
d 深部層状角膜移植 e 治療的レーザー角膜切除術
- 45 77歳の女性。右眼白内障手術2週間後から視力低下を自覚したため来院した。矯正視力は右0.2。既往歴と家族歴に特記事項はない。前房内フレア値は右23 photon count/msecond(pc/ms)。右眼眼底写真とOCT像およびフルオレセイン蛍光眼底造影写真を別図45A, 45B, 45Cに示す。
適切な治療はどれか。
a 網膜レーザー光凝固 b 抗VEGF薬硝子体内注射
c インフリキシマブ点滴静注 d 副腎皮質ステロイド局所投与
e 副腎皮質ステロイド全身投与

- 46 58歳の女性。左眼の視力低下を自覚し、左眼の白内障手術目的で紹介されて来院した。矯正視力は右1.2、左0.8。眼圧は右15 mmHg、左20 mmHg。両眼の細隙灯顕微鏡写真と前眼部OCT像およびスペキュラマイクロスコープ写真を別図46A、46B、46Cに示す。
誤っているのはどれか。
- a 右眼にも同様の角膜内皮障害が生じるリスクは低い。
 - b 左眼の虹彩萎縮は進行性である。
 - c 左眼の白内障術後に角膜混濁が起こる可能性が高い。
 - d 左眼は今後眼圧が上昇し、緑内障を発症するリスクが高い。
 - e 左眼は白内障手術を行うことによって隅角は広くなり、眼圧は低下する。
- 47 61歳の女性。両眼の高眼圧と視野障害の進行で紹介されて来院した。軽度遠視で矯正視力は両眼ともに0.5。2剤点眼下で眼圧は右21 mmHg、左19 mmHg。右眼細隙灯顕微鏡写真と隅角鏡写真を別図47A、47Bに示す。
適切な治療方針はどれか。
- a 点眼薬の追加 b レーザー虹彩切開術 c レーザー線維柱帯形成術
 - d 水晶体再建術 e 線維柱帯切除術
- 48 63歳の男性。両眼の開放隅角緑内障の手術加療目的で紹介されて来院した。矯正視力は右0.4、左0.3。眼圧は3剤点眼下で右21 mmHg、左22 mmHg。自覚症状はない。両眼のHumphrey視野(10-2プログラム)検査の結果を別図48に示す。
追加の検査で有用でないのはどれか。
- a 隅角検査 b 眼底OCT c 多局所ERG
 - d エスターマン視野 e スペキュラマイクロスコープ
- 49 46歳の男性。建設作業中に異物が左眼に飛入した。受傷後4日目に突然の眼痛と視力低下を来したため来院した。矯正視力は左光覚弁。左眼前眼部写真を別図49に示す。
行うべきでない検査はどれか。
- a 眼底検査 b 眼窩部MRI c 眼窩部単純CT d 眼窩部単純X線 e 超音波Bモード
- 50 66歳の女性。右眼の原発開放隅角緑内障に対し2週前に眼圧下降手術を受けた。右眼全周隅角写真と前眼部OCT像を別図50A、50Bに示す。
本術式に多い合併症はどれか。2つ選べ。
- a 浅前房 b 前房出血 c 房水漏出 d 低眼圧黄斑症 e 一過性眼圧上昇